

所属集団内の対人嫌悪事態における嫌悪者の行動¹⁾

筑波大学大学院 (博) 人間総合科学研究科 金山富貴子

筑波大学心理学系 山本真理子

A study of the behavioral dynamics when someone is disliked by another member of the same social group

Fukiko Kanayama and Mariko Yamamoto (*Institute of Psychology, University of Tsukuba, Tsukuba, 305-8572, Japan*)

This study seeks to investigate the behavioral dynamics when someone is disliked by another member of the same social group. Two hundred and eighty one undergraduates were asked to imagine a particular person that they dislike who belongs to the same social group, and to completed a questionnaire concerning their behavior. The main findings were as follows: (1) Seven kinds of behavior (ingratiating, contact avoidance, not dwelling on dislike, point out the faults in the disliked person, backbiting, teasing the disliked person, and attempting to get along with the disliked person) were identified. (2) Among these seven behaviors, there were differences in the backbiting, teasing, and pointing out faults behaviors according to the status of the disliked person. Path analyses suggest that the dynamic behavioral differences reflect the importance of the social group perceived by the individual, and that the social power exerted by the disliked person on these behavioral dynamics varies according to their status.

Key words: interpersonal dislike, in-group behavior, status of disliked person, importance of social group, social power

我々は、日常様々な人と接するが、嫌いな相手(以下、嫌悪対象者)に対しては一般的に拒否や回避の欲求や行動が生起する傾向があることが示されている(齊藤, 1990)。しかし、学校、学級、アルバイト、会社といった集団に所属する中で日常接する人に対しては、たとえ相手を嫌いであったとしても、相手との相互作用を避けられず、拒否や回避と

いった行動をとれないことが多い。嫌悪対象者を拒否・回避できない場合には、嫌悪者はどのような行動をとるのであろうか。本研究では、自分が属している組織・集団内に嫌悪対象者が存在する場合に、嫌悪者がどのような行動をとっているのかについて検討する。

他者に対する行動は、従来の対人行動の分類を検討した齊藤(1990)によると、支配-服従と親和-拒否の2軸で整理される。それによると、嫌悪者は嫌悪対象者に対しては基本的に拒否的行動を行うが、嫌悪対象者に対して優越感を持っている場合には、攻撃的行動を行ない、嫌悪対象者に対して劣等感を持っている場合には、回避的行動を行うとされる。しかし、齊藤(1990)が行った実証的研究においては、嫌いな相手に、拒否的行動、回避的行動、

1) 本研究は、2003年日本心理学会第67回大会および2003年日本社会心理学会第44回大会において発表したデータを再解析したものである。なお、調査の実施の際に、2002年度筑波大学人間学類「心理学研究法」にて第一筆者の担当班に参加した学生(今井拓朗・菊地亜衣子・白石貴大・西井宏美・花房美奈子・藤野比佐)の協力を得た。調査に回答して下さった学生の皆様に感謝申し上げます。

対立的行動²⁾を行う傾向があることは示されているものの、行動の平均値がそれほど高い値ではない。そのため、確認の必要があるであろう。

また、人が行う行動のうち、嫌悪に関連すると考えられる行動として、対人葛藤への対処行動がある。対人葛藤は、“一人の人間の行動が他の人の行動の妨害になるときに起こる相互作用過程” (Peterson, 1983) をさし、“ある人の行動、感情、思考の過程が、他の人の行動によって妨害されている状態” (Kelley, 1987) と定義されている (飛田, 1996)。対人葛藤の研究では、相手との間に生じた葛藤に焦点が当てられているため、葛藤を生起させた相手が必ずしも嫌いな人物であるとは限らない。しかし、“葛藤は組織上の理由で生じることもあるが、多くは2人がお互いに感情的に嫌いなために生じる” (Argyle & Henderson, 1995) と述べられていることから、本研究に援用可能であろう。

対人葛藤時の行動については、従来の対人葛藤の研究を詳細に検討した Sillars (1980) の対人葛藤への対処行動の分類枠組みをもとに再検討を行った藤森 (1989) の研究がある。藤森 (1989) は、男子寮に住む大学生を対象に、寮生活において対人葛藤を経験した時にとる行動を調査し、コミュニケーションの促進-抑制と個別的解決-協調的解決の2軸からなる4カテゴリーの対処方略を得ている。その4カテゴリーとは、“相手の回避 (相手と話さないようにしたり、部屋を変えたりする)” や “無行動 (問題を我慢し、解決のための具体的な行動を取らない)” や “暗示・例示 (問題があることを明確に述べないで、そのことを冗談に言ったり、暗示したりする)” を含む「抑制・個別型」、 “共感的調整 (相手の気持ちや要求を察し、それに沿うように振舞う)” や “表面的同調 (自分の意見や考えには反するが、表面的には相手の意見や要求を受け入れる)” や “内面的同調 (相手の要求を受け入れ、それに従う)” を含む「抑制・協調型」、相手に対する “要求・命令” や “依頼” や “説得” を含む「促進・個別型」、 “相手への接近” や “開示 (相手を非難したりせず、自分の行動の理由などの情報を提供する)” や “協力的提案 (相手を非難したりせず、相互に受け入れ可能な解決策を示し、話し合う)” を含む「促進・協調型」である。藤森 (1989) の研究も対人葛藤時の行動に焦点が当てられているた

め、対人葛藤を生起させた相手は必ずしも嫌いな人物ではないが、所属集団内に嫌悪対象者がいる場合に嫌悪者がとる行動として、対人葛藤時にとられる行動のいくつかが当てはまる可能性があることが考えられる。

そこで本研究では、対人行動の研究や対人葛藤への対処行動を参考にしながら、自分が属している組織・集団内に嫌悪対象者が存在している場合に、嫌悪者がどのような行動をとるのかを検討することを目的とする。

ところで、本研究では同じ集団内に嫌悪対象者がいるという事態を扱うが、集団内には年齢や役割の差による上下関係や同輩関係といった階層構造が存在している。上下関係とは “社会的地位や勢力の格差から生じる優越と従属との地位的な人間関係” (森, 1993) であり、一般的に上下関係は、上位者の強制による支配関係と、下位者の自発的追従による指導関係とで構成されている。このことは上下関係によって相手に対してとる行動に違いがあることを示唆している。前述の藤森 (1989) の研究では、相手が先輩であるほど抑制・協調型の方略 (内面的同調、表面的同調、共感的調整)、後輩であるほど促進・個別型の方略 (要求・命令、説得、依頼) をとるという結果が示されている。このことから、同一組織内においてある人物を嫌いになった場合にも、嫌悪対象者との立場の上下関係によって、嫌悪者との行動に違いがあることが予測される。

集団内でこのような上下関係による行動の違いを生むのは、立場関係によって自分や組織に対する影響力の強さが異なっているからであることが考えられる。人が他者に何らかの影響を与えることは “社会的勢力” と呼ばれており、“他の人の行動、考え、感情などを自分の望むように変えることのできる能力” (今井, 1996) と定義されている。一般的には、上の立場にいる人のほうが社会的勢力は強いことが考えられるが、同等や下の立場の人物も、自分や組織に対して少なからず影響力をもっている可能性がある。今井 (1996) は、Rahim (1983) などの研究を概観して組織内の影響の流れと葛藤の解決方略との関連をまとめ、自分よりも影響力のある相手と葛藤状態になったときには、自分が折れることによって解決しようとし、影響力が自分と同等かそれ以下の相手と葛藤状態になったときには、自分の解決を考えに盛り込めるような、妥協的、統合的解決が用いられると述べている。このことから、所属集団内の対人嫌悪事態において嫌悪者がどのような行動をとるのかは、嫌悪対象者との上下-同等といった階層構造内の形式的な立場関係だけではなく、嫌悪対

2) 対立行動とは、齋藤 (1990, P74) の論述によると、“相手に対して対立、反抗する” という内容の行動項目である旨が記されている。このことから、攻撃的行動と類似した行動であると解釈される。

象者が自分や組織に対してもつ影響力も影響を及ぼしている可能性があり、相手が影響力を持っている場合には、相手との関係を悪化させるような行動はあまり行われなことが予測される。

また、嫌悪者がとる行動は、嫌悪者が自分の所属する組織を重要なものと感じているかどうかにも影響することが考えられる。所属組織が嫌悪者にとって重要なものである場合には、自分と嫌悪対象者との対立が顕在化すると自分が組織に居づらくなったり、組織内の成員に悪影響が及ぶ可能性が懸念されるため、相手との関係が悪化するような行動は行われにくいと考えられるからである。所属組織の重要性には、その集団に愛着を持っていることから生じる重要性と、その集団への所属を辞めた場合に損失が大きいため所属する必要があることから生じる重要性とが考えられる。これらは、組織コミットメントの研究を概観した鈴木(2002)による、情緒的コミットメントと功利的コミットメントに概念的に対応している。しかし、組織コミットメントの研究においては、各コミットメントと仕事の成果や退職との関連などが着目されているため、集団内で嫌悪対象者がいる場合の嫌悪者がとる行動への影響に関しては検討されていない。

そこで本研究では、上-同輩-下といった嫌悪対象者との立場関係や、相手が自分や組織に対して持つ影響力、嫌悪者が感じている所属組織の重要性によって、嫌悪者がとる行動に違いがみられるかについても併せて検討する。

方 法

調査対象 茨城県内の大学生281名(男性151名、女性131名)。

調査時期 2003年2月上-中旬

調査方法 調査は大学の講義時間の一部を利用して質問紙を配布する集団形式で行った。

質問紙の構成

1. 嫌悪対象者の特定

上-同等-下のうちいずれかの立場関係にある嫌悪対象者を1名想起するよう求めた。上条件の質問紙では「現在あなたが所属している公的組織(サークル、ゼミ、アルバイト、研究室など)で長期にわたって頻繁に会うあなたより立場が上の人で、個人的に親しくなる前に相手を嫌だと思ったために、それ以上関係が深くなっておらず、できれば積極的に関わりたくないと思っているけれども関わりを持たなくてはならない同性の人物を1人だけ思い浮かべて下さい。」と教示した。同等条件の質問紙では

点線部の記述を「あなたと立場が同等の人」に、下条件の質問紙では「あなたより立場が下の人」にした。そして、ここで想起された人物を「Aさん」とし、以下の質問に回答するよう求めた。

2. 質問内容

(1) 嫌悪者がとる行動

齊藤(1990)が用いた対人行動の項目や藤森(1989)の対人葛藤時の対処行動を参考に66項目を作成し、各行動をどの程度行っているかについて、「非常にあてはまる」「あてはまる」「どちらかというにあてはまる」「どちらかというにあてはまらない」「あてはまらない」「全くあてはまらない」の6件法(6-1点)で尋ねた。

(2) 所属組織の重要性

鈴木(2001)の組織コミットメント尺度とEvans & Jarvis(1986)の集団への態度尺度などを参考に12項目を作成し、各項目に対して「非常にあてはまる」「あてはまる」「どちらかというにあてはまる」「どちらかというにあてはまらない」「あてはまらない」「全くあてはまらない」の6件法(6-1点)で尋ねた。

(3) 嫌悪対象者のもつ影響力

今井(1996)の社会的勢力認知尺度などを参考に14項目を作成し、「非常にあてはまる」「あてはまる」「どちらかというにあてはまる」「どちらかというにあてはまらない」「あてはまらない」「全くあてはまらない」の6件法(6-1点)で尋ねた。

(4) 嫌悪対象者への好悪程度

「好き(好意度)」「嫌い(嫌悪度)」「苦手(苦手度)」「迷惑(迷惑度)の各項目について相手をどの程度そう思うかを、「非常にそう思う」「そう思う」「ややそう思う」「あまりそう思わない」「そう思わない」「全くそう思わない」の(6-1点)で尋ねた。

結 果

1. 嫌悪者がとる行動の構造

(1) 嫌悪者がとる行動の因子分析

嫌悪者がとる行動に関する66項目に対して、因子分析(主成分分解、プロマックス回転)を行なった。スクリー法を用いて4-8因子までを検討し、因子の解釈可能性と構造の安定性から7因子解を採用した(累積寄与率53.5%)。因子分析の結果をTable 1に示す。各因子に負荷量が高い項目(.40以上)について解釈を行ったところ、各因子は以下のように解釈された。

第1因子は、「Aさんの気持ちや要求を察し、そ

Table 1 嫌悪者がとる行動の因子分析結果 (主成分解, プロマックス回転後の因子パターン行列)

項目内容	f1	f2	f3	f4	f5	f6	f7	h ²	平均値	SD
取り入り (α=.87)										
50 Aさんの気持ちや要求を察し、それにそうように振舞う	.84	.05	-.05	-.05	-.04	.02	-.01	.64	2.34	1.36
45 Aさんに私を好ましく思ってもらえるように振舞っている	.84	.11	-.09	.05	-.05	.00	-.11	.63	2.15	1.29
44 Aさんの前では、できるだけAさんをほめるようにしている	.74	.10	-.08	.05	.01	-.01	-.01	.53	2.13	1.22
49 Aさんの要求は、受け入れ、従うようにしている	.62	.03	.11	.11	-.09	-.04	.02	.49	2.60	1.44
47 Aさんのことをよく知ろうとしている	.59	-.18	-.13	.07	.04	-.03	.29	.63	2.35	1.31
46 Aさんが困っていたら手助けをするようにしている	.55	-.22	.09	.02	.07	-.10	.18	.56	2.98	1.47
43 Aさんと会話をする時は互いに楽しく会話ができるように心がけている	.50	-.31	.17	-.06	.13	-.12	.23	.63	2.98	1.59
42 Aさんと積極的に話をするようにしている	.49	-.37	-.07	.05	.14	-.02	.26	.62	2.35	1.30
19 Aさんと会話中に沈黙になっても、何か話題を出して話すようにしている	.49	-.07	.12	-.05	.00	.15	.06	.34	2.62	1.54
57 Aさんに対して批判めいたことを口にしないようにしている	.47	.24	.33	-.07	-.16	.06	-.22	.41	3.04	1.60
24 私が悪いところがなかったか考えるようにしている	.45	.14	.03	-.08	.10	.04	.36	.42	2.94	1.53
55 私が我慢すれば済むと思ひ、嫌なことがあっても耐えている	.43	.21	.23	.02	.09	-.12	-.03	.37	3.21	1.66
接触回避 (α=.85)										
25 Aさんと目を合わせないようにしている	.15	.88	-.15	-.14	-.16	.13	.06	.66	3.17	1.63
21 Aさんと話す時は、早めに会話を切り上げている	-.01	.78	-.10	.15	-.02	-.17	.08	.56	3.71	1.57
33 Aさんがいそうな場所には近づかないようにしている	-.19	.75	-.03	-.21	.01	.13	.16	.56	2.99	1.74
17 Aさんに会っても気づかないふりをするようにしている	-.17	.71	.04	-.29	-.13	.24	-.07	.56	3.04	1.67
5 Aさんとの間に嫌なことがあったら他のことを考え気を紛らわしている	.22	.63	.10	.00	.05	-.17	.40	.49	3.18	1.61
16 Aさんと親しいつきあいをしないようにしている	-.13	.62	.22	-.16	-.01	.07	.03	.50	3.91	1.48
32 Aさんから話しかけられた時だけ話している	-.10	.61	.28	.06	-.13	.06	-.11	.48	4.05	1.48
14 Aさんと関わりあわないようにしている	-.16	.61	.20	-.19	-.04	.07	.07	.47	3.70	1.66
22 Aさんに話しかけられたときは、適当にあしらっている	-.23	.59	-.01	.17	.08	-.08	-.04	.52	3.47	1.59
20 Aさんに対して冷たい態度をとっている	-.12	.57	-.20	.25	.16	-.07	.13	.55	2.76	1.46
7 Aさんの嫌な部分ばかりが目につく	.01	.51	-.02	.19	.25	-.21	-.01	.49	3.43	1.63
39 話しかけられなくても、同意を求められるまでは気付かないふりをする	.03	.46	-.09	.07	.18	.30	.09	.55	1.93	1.27
18 Aさんのことを嫌だと思った時は、直接は言わず表情で伝えている	.02	.42	-.10	.14	.14	.14	.18	.38	2.22	1.39
わりきり (α=.82)										
62 表面上は愛想よくする	.08	-.11	.76	-.01	.10	.03	-.27	.59	4.12	1.41
65 Aさんに対しては、他の人に対する時と同じように振舞っている	.12	-.27	.69	-.01	-.05	.23	.01	.55	3.70	1.53
61 Aさんに何もせず、自然の成り行きに任せている	-.19	.19	.67	-.17	-.10	.15	.13	.50	4.42	1.42
60 Aさんとの間で嫌なことがあっても、こだわらないようにしている	-.01	.06	.67	.02	-.10	.18	.18	.53	3.78	1.54
3 Aさんと表面上の付き合いをするようにしている	-.21	.23	.58	.19	.16	-.24	-.15	.59	4.53	1.35
59 Aさんの嫌な部分をあまり気にしないようにしている	-.18	.03	.55	.06	-.20	.08	.21	.52	3.41	1.50
58 Aさんと適度な距離を保つようにしている	-.04	.36	.54	.08	.06	-.16	.06	.52	4.36	1.50
64 しなければならぬことはするが、それ以外ではAさんに関わらない	-.15	.45	.52	-.10	.12	-.04	-.02	.59	4.37	1.47
23 Aさんに対して礼儀正しく振舞っている	.20	-.09	.51	-.24	.09	.19	.12	.41	3.61	1.48
29 嫌だと思っても表面上はAさんに合わせる態度をとっている	.34	.11	.49	.05	.15	-.01	-.37	.56	3.49	1.55
積極解決 (α=.85)										
52 私が嫌だと思っているところを改善するようAさんに命令する	.06	-.13	-.08	.74	.01	.17	-.17	.65	1.44	0.90
53 私の要望を開き入れてくれるようAさんにお願する	.29	-.05	-.10	.73	-.11	.01	-.10	.66	1.71	1.09
48 Aさんに改善してほしい点を話し、解決策を話しあう	.26	-.10	-.14	.66	-.10	.10	.07	.68	1.67	1.05
66 Aさんに改善してほしい点を話し、私の気持ちを理解してもらうよう働きかけている	-.04	-.10	-.01	.65	-.21	.29	.21	.61	1.80	1.16
26 Aさんに直接文句を言うようにしている	-.22	-.07	.01	.64	.10	.23	.03	.55	2.15	1.48
4 Aさんに要望がある時は、理由を挙げて要望を受け入れるよう説得する	-.02	.08	.13	.58	-.18	-.14	.30	.45	2.76	1.54
56 Aさんにできるだけ私の考えを言うようにしている	-.15	-.06	.02	.56	.04	-.04	.07	.45	2.21	1.43
40 Aさんのことを嫌だと思った時は、冗談めかして伝えている	-.07	.06	.17	.50	.03	.35	-.02	.47	1.90	1.31
9 Aさんに嫌みを言うことがある	-.18	.09	-.05	.48	.12	.18	.20	.45	2.01	1.33
陰口 (α=.88)										
37 Aさんのことで友人などに愚痴を言う	-.10	-.04	-.03	-.21	.95	.00	.24	.73	2.81	1.86
28 友人などとAさんについて陰口を言う	-.04	-.08	.05	-.09	.92	.14	.01	.79	2.69	1.76
30 周囲の人にAさんの嫌なところを話し、Aさんを悪者になっている	.07	-.06	.00	-.12	.79	.30	-.08	.73	2.18	1.53
38 友人達との会話の中でAさんのことを話し、面白がっている	.04	-.05	.04	.09	.79	.06	-.02	.69	2.42	1.68
6 Aさんに関して嫌なことがあったら、他の人に話して悪態でもらっている	.02	-.01	-.07	-.03	.68	-.01	.44	.59	2.31	1.52
51 私自身の心の中でAさんを笑いのにする	.17	.20	-.04	.22	.45	-.03	-.30	.60	2.19	1.46
意地悪 (α=.82)										
36 私が嫌だと思ふことをAさんがした時は即座にマネをして見せる	-.03	.02	.16	.09	.09	.81	-.05	.72	1.42	0.93
34 周囲の人たちとAさんをいじめる	-.06	-.01	.17	.15	.02	.78	.04	.66	1.31	0.74
35 周囲の人と団結しAさんが組織をやめるようしむける	-.06	.08	-.01	.13	-.03	.70	.08	.61	1.32	0.79
31 Aさんとけんかをしている	-.10	-.07	-.02	.15	.21	.61	.01	.54	1.56	1.16
27 Aさんに伝えるべきことは、知らないふりをして伝えない	.18	.15	-.03	.12	.14	.47	-.12	.48	1.95	1.32
穏便解決 (α=.54)										
11 Aさんとの間に嫌なことがあった時は、その原因を考える	.33	.28	-.07	-.02	.12	-.04	.57	.52	2.57	1.55
1 Aさんとうまくやるにはどうしたら良いか、友人などに相談している	.02	.01	-.05	.06	.33	.16	.45	.41	1.76	1.23
15 Aさんのよい部分も見るようにしている	.20	-.05	.31	.09	-.11	-.03	.45	.55	3.49	1.46
残余项										
2 Aさんの嫌な部分も個性のひとつとして割り切っている	-.01	-.20	.36	.16	-.10	.07	.39	.44	3.79	1.61
13 Aさんと関わらなければならない時は、第三者に頼んでいる	.05	.37	-.06	.10	.03	.28	.38	.43	1.89	1.24
8 Aさんの長所は認めている	.17	-.19	.29	.09	.00	-.23	.37	.54	3.98	1.48
12 Aさんと私の間でもめことが生じた時は、第三者に間に入ってもらう	.05	.13	-.04	.26	.09	.20	.33	.38	1.87	1.24
10 Aさんを反面教師にし、私の成長の糧にするようにしている	-.17	.28	.03	.01	.30	-.17	.30	.32	2.89	1.70
63 聞きたくない話をされた時は、話題を変える	-.07	.26	.26	.06	.10	.13	.21	.25	2.98	1.53
41 Aさんと会った時は、挨拶をするようにしている	.19	-.32	.37	.06	.21	-.09	.19	.46	3.44	1.55
54 できるだけAさんの気持ちになって考えてみるようにしている	.39	.03	.10	.34	-.18	.13	.17	.50	2.20	1.36
因子間相関	f1	f2	f3	f4	f5	f6	f7			
	f2	-.15								
	f3	.31	.08							
	f4	.35	.12	-.03						
	f5	.08	.48	.03	.45					
	f6	.10	.23	-.27	.28	.29				
	f7	.34	-.26	.17	.23	-.07	.07			

Note. N=258. 得点の範囲は1-6点.

れにそうように振舞う”“Aさんに私を好ましく思ってもらえるように振舞っている”などの項目の負荷が高く、相手に合わせる、手助けする、相手をほめるなど、相手に好ましく思われるような行動を示していると解釈されたため「取り入り」と命名した。第2因子には、“Aさんと目を合わせないようにしている”“Aさんと話す時は、早めに会話を切り上げている”などの項目の負荷が高く、相手との接触を少なくするような行動を示していると解釈されたため「接触回避」と命名した。第3因子には、“表面上は愛想よくする”“Aさんに対しても他の人に対する時と同じように振舞っている”などの項目の負荷が高く、相手の嫌な部分にこだわらず、相手に対しても他の人と同じように振舞うことを示していると解釈されたため「わりきり」と命名した。第4因子には、“私の要望を聞き入れてくれるようAさんをお願いする”“Aさんに改善してほしい点を話し、解決策を話し合う”などの項目の負荷が高く、相手の嫌な点を改善してもらえるように相手に積極的に働きかけていることを示していると解釈されたため「積極解決」と命名した。第5因子には、“Aさんのことで友人などに愚痴を言う”“友人などとAさんについて陰口を言う”などの項目の負荷が高く、周囲の人に相手の陰口を言う行動を示していると解釈されたため「陰口」と命名した。第6因子には、“私が嫌だと思うことをAさんがした時は即座にマネをして見せる”“周囲の人たちとAさんをいじめる”などの項目の負荷が高く、相手が嫌がり困ったりするようなことをする行動を示していると解釈されたため、「意地悪」と命名した。第7因子には、“Aさんとの間に嫌なことがあった時は、その原因を考える”“Aさんとうまくやるにはどうしたら良いか、友人などに相談している”などの項目の負荷が高く、自分で考えたり他者に相談したりしながら相手との関係を悪化させないためにどうしたらよいかを模索する行動を示していると解釈されたため「穏便解決」と命名した。

因子ごとに負荷量.40以上の項目について素点を単純加算した後、各因子の項目数で割り、尺度得点を算出した。なお、尺度得点の算出にあたって、.40以上の負荷量を2つ以上の因子にもつ項目と、他の因子への負荷量との差が絶対値.10以下の項目は、因子をあまり弁別していない項目であると考えられるため、尺度得点の算出からは除いた。各尺度の項目数と平均値、および α 係数をTable 2に示す。この7尺度の α 係数については、「穏便解決」の α 係数が.54とやや低いが、他の尺度は全て.80を超えており、ある程度の信頼性があると判断した。

各尺度得点の平均値を見ると、「わりきり」行動の平均値(3.92点)は理論的中間値(3.5点)よりも高く、次に「積極回避」行動の平均値(3.19点)が高かった。一方、「積極解決」行動(1.96点)や「意地悪」行動(1.52点)の平均値は低かった。このことから、同一の所属組織における嫌悪対象者に対して平均的に最も行われている行動は、わりきり行動であり、次に接触回避行動を行いやすく、積極的解決行動や意地悪行動はあまり行わないことが示された。

(2) 各行動の特徴

各行動と好悪程度4項目との相関をTable 3に示す。また、嫌悪者がとる行動の構造を検討するため、7因子の尺度得点について、二次因子分析(主成分分解、バリマックス回転)を行ったところ、3因子が抽出された(累積寄与率77.02%)。二次因子分析の結果をTable 4に示す。第1二次因子には、「取り入り」「積極解決」「穏便解決」の3行動の負荷が高かった。従って、この因子は、相手に好ましく思われることを意図した行動や、相手に改善を働きかける行動や、関係を悪化させない方法を模索する行動といった、相手との関係を改善することを志向した行動を表すと解釈された。また、これらの3行動は、共に好意度との間に正の相関があったことから、『関係改善行動』と命名した。第2二次因子には、「接触回避」「陰口」「意地悪」の3行動の負荷が高かった。この3行動は、相手に対して嫌悪を表出するような行動であり、嫌悪度との有意な正の相関と、好意度との有意な負の相関を示していたことから、『嫌悪表出行動』と命名した。第3二次因子には「わりきり」のみの負荷が高く、その尺度の意味内容から『現状維持行動』と命名した。

(3) 嫌悪対象者との立場関係による差

嫌悪対象者との立場関係によって、嫌悪対象者に対してとる行動に違いがあるかどうかを検討するため、立場関係(上-同輩-下)を独立変数、各行動の平均値を従属変数とする1要因分散分析を行った。なお、独立変数は被験者間要因であった。その結果をTable 5に示す。

1要因分散分析の結果、「陰口」において有意差が示され、「意地悪」と「積極解決」において傾向差が示された。多重比較の結果、「陰口」は、同等や下の立場の人よりも自分より上の人に行くことが示された。また、「意地悪」は、下の立場の人よりも上の立場の人、「積極解決」は上の立場の人よりも下の立場の人に対して行う傾向のあることが示された。

2. 嫌悪者がとる行動に影響を及ぼす要因

(1) 所属組織の重要性と嫌悪対象者の持つ影響力の因子分析

所属組織の重要性に関する12項目と、嫌悪対象者の持つ影響力に関する14項目について、それぞれ因子分析（主成分分解、プロマックス回転）を行った。その結果、所属組織の重要性に関しては2因子が抽

Table 2 各行動の項目数, 平均値, 標準偏差, α 係数

尺度名	項目数	平均値	SD	α 係数
取り入り	11	2.62	0.95	.87
穏便解決	12	2.61	1.04	.85
積極解決	9	1.96	0.85	.82
接触回避	9	3.19	1.03	.85
陰口	5	2.45	1.37	.88
意地悪	5	1.52	0.77	.82
わりきり	3	3.92	0.95	.54

Note. N = 262. 得点の範囲は1 - 6点.

Table 3 嫌悪者がとる行動と嫌悪度, 苦手度, 迷惑度, 好意度との相関

	嫌悪度	苦手度	迷惑度	好意度
取り入り	-.239**	-.162**	-.167**	.348**
接触回避	.546**	.381**	.311**	-.440**
わりきり	.017	.111	-.009	-.032
積極解決	.071	-.153*	.112	.130*
陰口	.408**	.201**	.364**	-.307**
意地悪	.289**	.019	.191**	-.161**
穏便解決	-.062	-.038	-.014	.244**

Note. ** $p < .01$, * $p < .05$

出され（累積寄与率60.2%）、嫌悪対象者の持つ影響力に関しては3因子が抽出された（累積寄与率62.9%）。因子分析の結果をそれぞれTable 6~7に示す。各因子に負荷量が高い項目（.40以上）について解釈を行ったところ、各因子は以下のように解釈された。

まず、所属組織の重要性に関しては、第1因子には“その組織に親近感を持っている”“その組織に愛着を感じている”などの項目の負荷が高く、自分が所属している組織に対して愛着を感じていることを示していると解釈されたため、「組織への愛着」と命名した。また、第2因子には、“その組織から離れると学生生活に支障をきたす”“その組織から離れると、自分の社会的地位が下がる”などの項目の負荷が高く、自分の生活や社会的地位をまもるためにその組織に所属する必要があると感じていることを示していると解釈されたため、「所属の必要」と命名した。

嫌悪対象者の持つ影響力に関しては、第1因子には“Aさんと仲が悪くなると、その組織から私が追い出される可能性がある”“Aさんと仲が悪くなると、自分の評価が下がってしまうと思う”などの項目の負荷が高く、自分のその組織への所属や周囲への評価に嫌悪対象者が強い影響力を持っていることを示していると解釈されたため、「自分への不利益」と命名した。第2因子には、“Aさんと仲が悪くなると、組織内の雰囲気が悪くなると思う”“Aさんと仲が悪くなると、周りの人が活動や仕事をしづらくなると思う”などの項目の負荷が高く、組織内の雰囲気や周囲の人の活動に嫌悪対象者が強い影響力を持っていることを示していると解釈されたため、「組織への悪影響」と命名した。第3因子には、“自分以外にもAさんのことをよく思っていない人がい

Table 4 嫌悪者がとる行動の二次因子分析結果（主成分分解、バリマックス回転後の因子負荷量）

尺度名	F1	F2	F3	h^2	平均値	SD
関係改善行動						
f1 取り入り	.81	-.14	.33	.79	2.62	0.95
f7 穏便解決	.78	.11	.24	.68	2.61	1.04
f4 積極解決	.74	.37	-.30	.78	1.96	0.85
嫌悪表出行動						
f2 接触回避	-.21	.84	.26	.83	3.19	1.03
f5 陰口	.18	.82	.00	.70	2.45	1.37
f6 意地悪	.37	.70	-.33	.73	1.52	0.77
現状維持行動						
f3 わりきり	.25	.07	.90	.88	3.92	0.95
因子負荷量の2乗和	2.59	1.71	1.10			

Note. N = 262. 得点の範囲は1 - 6点.

と思う” “私は、Aさんよりも勝っていると思う”の項目の負荷が高く、嫌悪対象者よりも自分の方が強い立場にいることを示していると解釈し、「自分優位」と命名した。

因子ごとに負荷量.40以上の項目について素点を単純加算した後、各因子の項目数で割り、尺度得点を算出した。なお、尺度得点の算出にあたって、.40以上の負荷量を2つ以上の因子にもっている項目と、他の因子への負荷量との絶対値の差が、10以下の項目は、因子をあまり弁別していないので除いた。各尺度のα係数をTable 6-7に示す。「組織への愛着」「所属の必要」「自分への不利益」「組織への悪影響」については、α係数が.93-.69であり、信頼性があると考えられた。しかし、「自分優位」に関してはα係数が.48とかなり低く、項目数も2項目と少なかったため、以降の分析からは除いた。

(2) 嫌悪者がとる行動に対する所属組織の重要性と嫌悪対象者の持つ影響力との関連

嫌悪対象者に対する行動と、所属組織の重要性と嫌悪対象者の持つ影響力の関連を検討するために、重回帰分析を用いたパス解析を行った。

解析を行うにあたって、重回帰分析における多重共線性を避けるために、各変数の相関を算出した。

結果をTable 8に示す。その結果、「自分への不利益」と「組織への悪影響」との間に比較的強い相関が認められた。そこで、「組織への悪影響」を除いて以降の解析を行った。

解析の際には、所属組織への重要性（組織への愛着・所属の必要）と相手の持つ影響力（自分への不利益）の3変数を説明変数、嫌悪対象者への各行動を基準変数とする重回帰分析を、相手の立場関係（上・同等・下）別に繰り返し行った。重回帰分析は、いずれも変数増加法を用い、投入された変数の偏回帰係数の有意性（5%水準）の基準で変数の投入を打ち切った。以上の重回帰分析の結果からパス図を作成したものをFig. 1 - Fig. 3に示した。パス解析の結果は以下のようであった。

嫌悪対象者が自分よりも上の立場の人であった場合には、「所属の必要性」から「積極解決」「接触回避」「陰口」「意地悪」へ正のパスが見られ、「自分への不利益」から「取り入り」「穏便解決」「積極解決」「わりきり」への正のパスが見られた（Fig. 1）。

嫌悪対象者が自分と同等の立場の人であった場合には、「組織への愛着」から「取り入り」「穏便解決」「積極解決」へ正のパスが見られ、「自分への不

Table 5 嫌悪対象者の立場差に関する分散分析の結果

	嫌悪対象者の立場	N	平均値	SD	F値 (df)	p	多重比較
取り入り	上	94	2.61	0.94	0.43 (2, 273)		
	同輩	104	2.59	0.95			
	下	78	2.71	0.93			
接触回避	上	94	3.33	1.13	1.33 (2, 275)		
	同輩	103	3.09	0.92			
	下	81	3.22	0.98			
わりきり	上	95	3.98	1.08	0.23 (2, 274)		
	同輩	102	3.92	0.87			
	下	80	3.88	0.82			
積極解決	上	97	1.86	0.75	2.40 (2, 275)	+	上<下
	同輩	101	1.99	0.82			
	下	80	2.15	1.00			
陰口	上	96	2.82	1.50	4.96 (2, 276)	**	上>中・下
	同輩	102	2.28	1.21			
	下	81	2.29	1.28			
意地悪	上	96	1.67	0.92	2.39 (2, 278)	+	上>下
	同輩	104	1.42	0.60			
	下	81	1.54	0.81			
穏便解決	上	97	2.63	1.05	0.88 (2, 278)		
	同輩	104	2.72	0.99			
	下	80	2.51	1.03			

Note. ** p < .01, * p < .05, + p > .05

Table 6 所属組織の重要性の因子分析結果（主成分分解，プロマックス回転後の因子パターン行列）

	f1	f2	h ²	平均値	SD
組織への愛着 ($\alpha = .85$)					
4 私は、その組織に親近感を持っている	.91	-.04	.81	4.22	1.47
1 私は、その組織に愛着を感じている	.91	-.08	.80	3.96	1.60
3 私は、その組織の一員であることを誇りに思う	.88	.03	.78	4.11	1.64
2 私は、その組織のメンバーが好きだ	.88	-.15	.74	4.28	1.47
5 私は、本当に大切な友達がその組織に多くいる	.79	.01	.63	4.54	1.29
6 私は、その組織で行っている活動にやりがいを感じる	.76	.07	.60	4.50	1.42
8 私は、その組織に属することによって自分のやりたいことができる	.69	.10	.51	3.15	1.69
所属の必要性 ($\alpha = .42$)					
10 私は、その組織から離れると、学生生活に支障をきたす	.07	.82	.70	4.52	1.44
9 私は、その組織から離れると、日常生活を送るのに支障をきたす	.10	.82	.71	4.38	1.34
11 私は、その組織から離れると、自分の社会的地位が下がる	-.05	.66	.43	3.11	1.83
7 私は、他に選択肢がないので、この組織を離れられない	-.21	.53	.28	3.01	1.74
残余項目					
12 私は、その組織にいてことによって知識・技術を身につけることができる	-.24	.05	.22	2.45	1.59
	因子間相関				
	f1	f2			
	f2	.18			

Note. N = 280. 得点の範囲は 1 ~ 6 点.

Table 7 嫌悪対象者の持つ影響力の因子分析結果（主成分分解，プロマックス回転後の因子パターン行列）

	f1	f2	f3	h ²	平均値	SD
自分への不利益 ($\alpha = .88$)						
6 Aさんと仲が悪くなると、その組織から私が追い出される可能性がある	.89	-.11	.01	.71	1.77	1.17
2 私はAさんと仲が悪くなると、組織内での自分の地位を保てないと思う	.87	-.03	-.01	.73	2.02	1.28
7 私はAさんと仲が悪くなると、自分の評価が下がってしまうと思う	.84	.03	-.06	.73	1.99	1.30
8 私はAさんと仲が悪くなると、他の人から嫌われるのではないかと思う	.71	.15	-.14	.65	1.93	1.27
1 私はAさんと仲が悪くなると、何かあった時に助けてもらえなさそうで困る	.69	.06	.04	.52	2.05	1.31
9 私はAさんと仲が悪くなると、やりたくないことをやらされる可能性がある	.67	.01	.23	.48	2.01	1.41
5 私は、Aさんよりも劣っていると思う	.59	.02	-.06	.37	2.44	1.24
組織への悪影響 ($\alpha = .87$)						
10 私はAさんと仲が悪くなると、組織内の雰囲気が悪くなると思う	-.08	.95	.02	.84	3.25	1.71
12 私がAさんと仲が悪くなると、周りの人が活動や仕事をしづらくなると思う	-.05	.94	.01	.85	3.07	1.69
11 私がAさんと仲が悪くなると、周りの人を嫌な気分になせると思う	-.02	.93	-.01	.85	3.18	1.69
13 私はAさんと仲が悪くなると、自分の活動や仕事がしづらくなると思う	.20	.73	.00	.72	3.14	1.73
自分優位 ($\alpha = .48$)						
3 私は、自分以外にもAさんのことを良く思っていない人がいると思う	.03	-.06	.79	.63	4.49	1.46
4 私は、Aさんよりも勝っていると思う	-.02	.08	.76	.60	3.25	1.55
残余項目						
14 私は、これから先Aさんとはその組織を介してずっと関わっていくと思う	.11	.31	-.01	.14	3.31	1.68
	因子間相関					
	f1	f2	f3			
	f2	.47				
	f3	-.07	.06			

Note. N = 276. 得点の範囲は 1 - 6 点.

Table 8 嫌悪者がとる行動、組織の重要性、相手の持つ影響力との相関係数

	組織の重要性		相手の持つ影響力	
	組織への愛着	所属の必要性	自分への不利益	組織に害
嫌悪者がとる行動				
取り入り	.082	-.014	.492**	.485**
接触回避	.018	.206**	.079	-.066
わりきり	-.014	.012	.165**	.281**
積極解決	.170**	.153*	.313**	.217**
陰口	.169**	.176**	.079	.016
意地悪	.071	.206**	.300**	-.012
穏便解決	.121*	.085	.373**	.358**
組織の重要性				
組織への愛着	—	.152*	-.221**	-.020
所属の必要性		—	.070	-.056
相手の持つ影響力				
自分への不利益		.070	—	.498**
組織への悪影響				—

Note. ** $p < .01$, * $p < .05$

利益」から「取り入り」「穏便解決」「積極解決」「陰口」「意地悪」への正のパスが見られ、「所属の必要性」から「接触回避」への正のパスが見られた (Fig. 2).

嫌悪対象者が自分よりも下の立場の人であった場合には、「組織への愛着」から「取り入り」と「陰口」へ正のパスが見られ、「自分への不利益」から「取り入り」「穏便解決」「積極解決」「陰口」「意地悪」への正のパスが見られた (Fig. 3).

考 察

本研究では、大学生を対象に、所属集団内に嫌悪対象者が存在する場合に嫌悪者がとる行動を抽出し、各行動と嫌悪対象者との立場関係、所属組織の重要性、嫌悪対象者の持つ影響力との関連について検討した。

嫌悪者がとる行動

本研究では、嫌悪者が行う行動は次の7つの側面に分類された。「取り入り」は、相手に好ましく思ってもらうことを志向して行う行動である。「接触回避」は、相手との接触をできるだけ減らすようにする行動である。「わりきり」は、相手のことを嫌だと思ってしまうことがあってもこだわらないようにしたり、相手と接する時に表面上愛想良く振舞ったりする行動である。「積極解決」は、相手に対して自分が嫌だと感じている部分を改善してもらえるように相手に働きかける行動である。「陰口」は、相手の

嫌な部分などについて周囲の人に話す行動である。「意地悪」は、周囲の人と団結して相手を排除するなど、相手が困ったり嫌がったりするようなことをする行動である。「穏便解決」は、相手とうまくやっていくためにどうしたらよいのかを自分の中で模索する行動である。

本研究で得られたこれらの行動を先行研究と比較すると、「取り入り」は、藤森 (1989) における対人葛藤解決法略の下位側面の“共感的調整”“表面的同調”“内面的同調”に対応する行動であると考えられる。また、有倉 (1998) における取り入り行動の下位概念である“他者高揚”“親切的行為”といった上方向影響戦略として用いられる行動とも対応している。「接触回避」は、齋藤 (1990) の拒否的行動と回避的行動に対応し、藤森 (1989) の対人葛藤対処方略の“相手の回避”にも対応している。「わりきり」は、藤森 (1989) の対人葛藤対処方略の“無行動 (問題を我慢し、解決のための具体的な行動を取らない)”を含む行動である。しかし、本研究の「わりきり」は、相手の嫌な部分を気にしないようにしたり、適切な距離をとりながら相手に接するという内容が含まれていることから、“無行動”よりも建設的な意味をもつ行動であると考えられる。「積極解決」は、藤森 (1989) の対人葛藤対処方略の“依頼”“説得”“協力的提案”“開示”といった能動的で関係志向的な解決法略として位置づけられている行動に対応している。「陰口」と「意地悪」は、齋藤 (1990) の攻撃的行動 (相手を痛めつけ、こらしめる) や対立的行動 (相手に対立す

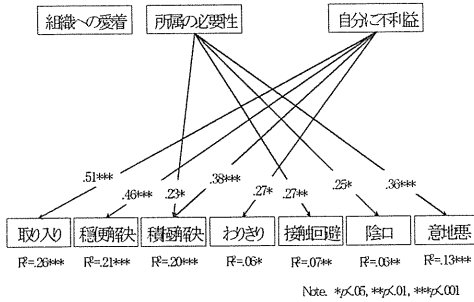


Fig. 1 嫌悪対象者に対する行動への組織の重要性と相手の持つ影響力との影響を示したパス図 (嫌悪対象者の立場が上の場合)

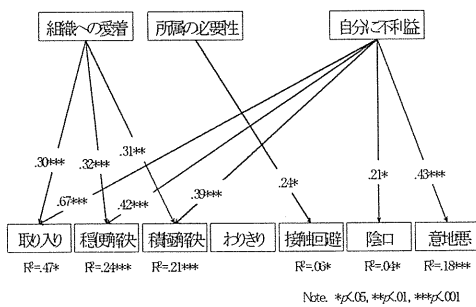


Fig. 2 嫌悪対象者に対する行動への組織の重要性と相手の持つ影響力との影響を示したパス図 (嫌悪対象者の立場が同等の場合)

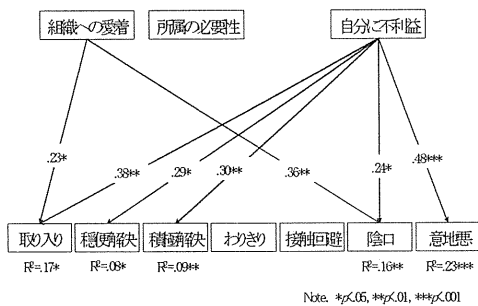


Fig. 3 嫌悪対象者に対する行動への組織の重要性と相手の持つ影響力との影響を示したパス図 (嫌悪対象者の立場が下の場合)

る、反抗する)をより具体化した行動であると考えられるが、本研究で得られた「陰口」と「意地悪」は共に、周囲の人に対する働きかけを含んでいた点で特徴的であった。嫌悪者が嫌悪対象者に対する自分の嫌悪を発散させるという意味で、嫌悪者にとって積極的で建設的な行動であると考えられる。「穏

便解決」は本研究でとりあげた先行研究との対応は見られなかった。

これらの7つの行動は、二次因子分析の結果から、本研究では次の3種類にまとまること示された。「取り入り」「積極解決」「穏便解決」は『関係改善行動』、「接触回避」「陰口」「意地悪」は『嫌悪表出行動』、「わりきり」は『現状維持行動』である。嫌悪表出行動は齊藤(1990)との対応があったもので、関係改善行動は対人葛藤解決法略と主に対応していた。

このうち、関係改善行動である「わりきり」は、尺度得点の平均値が最も高かったが、嫌悪度や好意度との間に有意な相関が無かったことから、相手に対する好悪の強さに関わらず、嫌悪対象者に対して全般的に行われやすい行動なのではないかと考えられる。嫌悪表出行動のうち、「接触回避」は平均値がやや高く、「陰口」と「意地悪」は平均値がやや低かったが、嫌悪度との正の相関が示されていたことから、相手を嫌いであるほど行う行動であると考えられる。この結果は、齊藤(1990)が行った実証的研究の知見と合致している。関係改善行動のうち、「取り入り」「穏便解決」「積極解決」は平均値が低かったものの、好意度との間に正の相関が示されたことから、嫌いな相手であっても相手に対する好意があるほど行う行動であると考えられる。

以上から、嫌悪者をとる行動には、拒否や回避や攻撃的な行動だけでなく、様々な行動があることが示された。

嫌悪者がとる行動と嫌悪対象者との立場関係との関連

本研究で抽出された各行動が、嫌悪対象者との立場関係(上-同輩-下)によって異なるかどうかに関しては、分散分析の結果から「陰口」において有意差、「意地悪」と「積極解決」において傾向差が示されたのみであった。結果から、「陰口」は自分と同等や下の立場の相手に対してよりも、自分より上の立場である相手に対して行われ、「意地悪」は自分と同等の相手よりも上の相手に対して行われ、「積極解決」は自分より上の相手よりも自分より下の相手に対して行われることが示された。これは、自分より下の人に対しては、自分の方が立場が上であるため、相手に嫌な部分を改善するよう要請することができるが、相手が上の人である場合には、そのような要請を行えないため、陰口を言うことで発散したり、周囲の人と団結して意地悪することを示しているのではないかと考えられる。

嫌悪対象者との立場関係別の嫌悪度と行動との関係

パス解析の結果から、各行動と組織の重要性・嫌悪対象者の持つ影響力との関連を嫌悪対象者との立場関係別に見ると、各行動は、自分より立場が上の嫌悪対象者の場合は、「所属の必要性」と「自分への不利益」から影響を受けており、自分と同等の嫌悪対象者の場合は、「組織への愛着」と「所属の必要性」と「自分への不利益」から影響を受けており、自分より下の嫌悪対象者の場合は、「組織への愛着」と「自分への不利益」からの影響を受けていた。以下に、具体的に見ていく。

まず、嫌悪対象者の持つ影響力については、「自分への不利益」が上-同等-下といった立場関係にかかわらず、「取り入り」「穏便解決」「積極解決」に影響を及ぼしていたが、上の人の場合にのみ「わりきり」にも影響を及ぼし、同等の場合と下の場合においては「陰口」と「意地悪」にも影響を及ぼしていた。この結果は、関係が悪化すると自分に不利益をもたらすような人物が嫌悪対象者である場合には、相手との立場関係にかかわらず、その不利益を減少させるため、嫌悪者は関係改善行動を行うことを示している。したがって、本研究では嫌悪対象者が影響力を持っている場合には嫌悪者は関係を悪化させるような行動はあまり行わないことを予測したが、結果は概ね予測と一致していたと考えられる。嫌悪対象者が上の人の場合に、わりきりにも影響していたのは、相手が自分よりも強い立場にいるため、わりきることによって相手との関係の悪化を最小限にとどめようとしているものと考えられる。一方、自分と同等の場合や自分よりも下の場合に陰口や意地悪に影響していたのは、対立によって生じる自分への害を減少させるために、自分と同様の意見をもつ味方をつくることによって、相手よりも強い立場に立とうとするためであると考えられる。

次に、所属組織の重要性に関しては、嫌悪対象者が自分よりも上の人である場合は、「所属の必要性」が「積極解決」と「接触回避」と「陰口」と「意地悪」に影響を及ぼしていたが、自分と同等の人である場合は、「所属の必要性」が「接触回避」に、「組織への愛着」が「取り入り」と「穏便解決」と「積極解決」に影響を及ぼし、自分より下の人である場合は、「組織への愛着」が「取り入り」と「陰口」に影響を及ぼしていた。

この結果から、自分がその集団に所属し続けなければならない場合には、自分より上の立場にある嫌悪対象者に対しては、積極解決の他に、接触回避・陰口・意地悪を行うが、同輩の嫌悪対象者に対して

は、接触回避のみを行い、また、その集団に愛着がある場合には、同輩の嫌悪対象者に対しては、関係改善行動（取り入りや積極解決や穏便解決）を試みるが、自分より下の立場にある嫌悪対象者に対しては、取り入りの他に陰口も行うことを示している。したがって、本研究では、所属組織の重要性は相手との関係を悪化させるような行動の生起には影響しないことを予測したが、予測と一致する結果はあまり得られなかった。

これは、立場関係の違いによって集団内での存在の意味するものが異なってくるからではないかと考えられる。立場が上の人とは、年齢や役割が自分よりも上にある人物であり、集団の運営に対して決定権を持っており、より下層の集団構成員に対して指導や命令などの様々な権限行使できる立場にある。そのため、立場が上の人には、自分が集団に所属し続けることに影響力をもっており、そのことが嫌悪表出行動や積極解決行動に影響を及ぼしたと考えられる。しかしながらここで、所属の必要性が、取り入りや穏便解決に影響を及ぼさなかったのは、組織に所属すること自体が必要であるため、相手が上の立場にあったとしても、友好的な関係をより積極的に形成するような行動には影響しなかったのではないかと考えられる。

また、立場が同等の人とは、最も一緒に活動をする頻度が高く、協力しあわなければならない場面が多く、親近感を持ちやすい存在である。そのため、自分が組織に愛着を持っているときには、取り入り・穏便解決・積極解決といった関係改善行動を行うが、所属の必要性があるだけの場合には、接触回避を行うのだと考えられる。

立場が下の人とは、多くの場合自分よりも後に組織に入ってきた存在であり、上の人への指導や命令に従う立場にあり、集団の運営に対して決定権をあまり持たない立場にある。そのため、自分が組織に所属し続けることはどの行動にも影響しなかったのだろうと思われる。しかし、組織に愛着があるときには、その組織を自分にとってより快適で良いものにしたいため、相手が下の人であっても取り入りを行い、できるだけ友好的な関係を形成するよう努力するが、相手を嫌いであるためその一方で陰口も言うのだと考えられる。

本研究のまとめと今後の課題

以上の結果から、自分の所属している集団内に嫌いな人がいる場合に、嫌悪者が取る行動としては、関係改善行動（取り入り・穏便解決・積極解決）、現状維持行動（わりきり）、嫌悪表出行動（接触回

避・陰口・意地悪)という3種7行動があることが示された。

嫌悪者のとる各行動のうち、「陰口」は、自分と同等や下の立場よりも上の立場にある嫌悪対象者に対して有意に行われ、「意地悪」は相手が自分と同等の立場よりも上の立場にある嫌悪対象者に対して行われ、また、「積極解決」は自分より上の立場よりも下の立場にある嫌悪対象者に対して行われる傾向が示された。このような立場の違いによって異なる行動は、所属組織の重要性と相手の持つ影響力によって生じており、自分より上の立場にある嫌悪対象者に対する陰口行動や意地悪行動は、嫌悪者が感じている所属の必要性からの影響を受けて生じ、下の立場にある嫌悪対象者への積極解決行動は、相手が自分に不利益を及ぼすことから生じていた。また、各行動の生起に影響を及ぼす要因は嫌悪対象者の立場関係によって異なっていたが、嫌悪対象者との関係の悪化によって自分に不利益が生じるような場合には、立場関係に関わらず関係改善行動(取り入り、穏便解決、積極解決)が行われていた。このことから、一般的には嫌悪者は嫌悪対象者に対しては、拒否・回避といった行動をとる傾向のあることが知られているが、自分に対する嫌悪対象者の影響力の強さがその嫌悪対象者との関係を改善する行動を生起させる可能性があることが示唆された。

本研究では上記のような結果が得られたが、積極的解決や陰口や意地悪の生起頻度は、必ずしも高いものではなかったため、再検討の必要があるものと思われる。

引用文献

- Argyle, M. & Henderson, M. 1985 *The Anatomy of Relationships*. Penguin books. (吉森讓(訳) 1992 仕事における人間関係 吉森讓(編訳)人間関係のルールとスキル (pp.241-281) 北大路書房).
- Evans, N.J., & Jarvis, P.A. 1986 *The Group Attitude Scale: A measure of attraction to group*. *Small Group Behavior*, 17, 203-216.
- 藤森立男 1989 日常生活に見るストレスとしての対人葛藤の解決過程に関する研究 社会心理学研究, 4, 108-116.
- 飛田操 1996 対人関係の崩壊と葛藤 大坊郁夫・奥田秀宇(編)対人行動学研究シリーズ3 親密な対人関係の科学 (pp.150-179) 誠信書房.
- 今井芳昭 1996 影響力を解剖する—依頼と説得の心理学— 福村出版.
- Kelly, H.H. 1987 Toward a taxonomy of interpersonal conflict process. In O. Stuart & S. Spacapan (Eds.) *Interpersonal processes* (pp.122-147) Sage. (飛田操(訳) 1996 対人関係の崩壊と葛藤 大坊郁夫・奥田秀宇(編)対人行動学研究シリーズ3 親密な対人関係の科学 (pp.150-179) 誠信書房)
- 齊藤勇 1990 対人感情の心理学 誠信書房.
- Sillars, A.L. 1980 *Attributions and communication in roommate conflicts*. *Communication Monographs*, 47, 180-200.
- 鈴木竜太 2002 組織と個人—キャリアの発達と組織コミットメントの変化— 白桃書房.
- 森博 1990 現代社会研究シリーズ13 現代社会の系譜 誠心書房.
- 森博 1993 上下関係 森岡清美・塩原勉・本間康平(編)新社会学辞典 有斐閣.
- Peterson, D.R. 1983 *Conflict*. In H.H.Kelly et al (Eds.) *Close Relationships*. (pp.360-396). Freeman. (飛田操(訳) 1996 対人関係の崩壊と葛藤 大坊郁夫・奥田秀宇(編)対人行動学研究シリーズ3 親密な対人関係の科学 (pp.150-179) 誠信書房)
- 有倉己幸 1989 上司への取り入り行動に関する研究 実験社会心理学研究, 38, 80-92.

(受稿3月22日:受理5月31日)